

山首上人さまご講演

修 しゅう

養 よう

動 どう  
じ じ  
ない ない  
心 こころ



「胡蝶ラン」

もと  
求める心から、捧げる心に

## 修養

修養するについて一番大事なことは、自分のわがままを捨て、世のため人のために尽くさせて頂くという心になりまして、それを実行して行くことが第一です。そういう心構えと働きで、徳が積まれるのであります。

|| 『樹徳』・徳を積みましょう・鈴木修一郎 ||

このご文章の出典『樹徳』は、戦前法音寺が「仏教樹徳修養団」という名で活動していた時代に発行されていた布教誌で、五十号くらいまで出されていたように記憶しています。

その当時に顧みますとこれは、御前様が三十代の頃に書かれたものと思います。御前様は、おりにふれて、などいろいろ教化の資料を出されましたが、いずれも大変わかりやすいご文章です。しかし、一度読ん

でもうそれで「わかった」というのではない、またいつか出して来て読んでみるといいと思います。その時の心が以前とは違いますから、また新しい信仰心が養われてゆくとおもいます。

ここで御前様がおっしゃることはまず「オレガ」という我をなくして世のため人のために尽くさせて頂く、つまり、徳を積むということです。

徳が積まれてゆけば、少々困ったことに出くわしても動じない心が具わって、生きる自信にもつながると教えられるのであります。

大分前のことですが、いつも講日にお参り下さるおばあさんがおられました。もう亡くなられたかも知れませんが、その方がある時、こんなことを言われました。

「私はお金もないし、頭も良くないから大したお徳は積めないけれど、お寺に来るといつもトイレのぞうりを揃えさせてもらいました。もうそろそろ年ですから、やがて閻魔様の所に行かなければなりません、閻魔様の前にも私には少しも怖いと思いません。胸を張って『お寺のトイレのぞうりをいつもきれいに揃えて来た』と言えるから、何の心配もしておりません」

このお言葉（ことば）を聞いてびっくりしました。

いざという時（とき）、閻魔様（えんまさま）に自信（じしん）を持ってこれだけはやって来た（き）と（い）えるものがあるのはすごいことです。私（わたくし）には今のところ、

この方（かた）のように誇（ほこ）れるものはありませんし、自信（じしん）もありません。閻魔様（えんまさま）と（い）えば、御前（ごぜん）様の作（つく）られた教育（きょういく）まんがによると恐（おそ）ろしい

お顔（かお）をしてみえますから、その前（まえ）に出（で）たらもう、震（ふる）え上が（あ）ってオドオドするしかないと思（おも）います。何（なに）の心配（しんぱい）もして（い）ない（と）言（い）われたこの方（かた）の（と）動（どう）じない心（こころ）に少（すこ）しでもあやかれたらと思（おも）いますが、そういう心（こころ）を養（やしな）うためにも、修養（しゅうよう）は大事（だいじ）なことであり

ます。その結果（けっか）として積（つ）まれた功德（くどく）は、今（こん）世（ぜ）だけのものでなく、あの世（よ）に行（い）つても立（りつ）派（ぱ）に通（つう）用（よう）しますから、閻魔様（えんまさま）のお眼鏡（めがね）に叶（かな）うに違（ちが）いありません。

修養（しゅうよう）の第一（だい）歩（ぽ）は、わがま（ま）を捨（す）てる（と）ころから始（はじ）まります。

私共（わたくしども）は我（が）が強（つよ）く、欲（よく）が深（ふか）いもの（と）から悩（なや）み・苦（くる）しみから離（はな）れられませんが、法華（ほけ）經（きやう）の三番目（さんばんめ）・譬喩品（ひゆほん）に『諸（しよ）の苦（くる）の因（いん）となる所（ところ）は、貪欲（とんよく）これ本（もと）なり』とあり（ま）す。苦（くる）とは、苦（くる）しみとか辛（つら）いという（と）ことで、本（ほん）来（らい）の意（い）味（み）は、思（おも）うよう（と）になら（な）ない（と）

ということですよ。そしてその本が貪欲、つまり「もっとももっと」と求めてやまない心、満足のない心にあるのです。「あれが足りない。これも足りない」という、わがままな思いです。

この思いと反対の心が、いつもお話しする「ありがたい」という心です。

「ありがたい」という心が出来ると、貪欲はなくなります。そして『貪欲を減すれば依止する所なし』で、悩みも何もなくなるのです。

欲の深い人間は、お金にしても、生活してゆけるだけのものがあればいいと思うの

に、「まだ足りない。もっと欲しい」という気持ちがあぬぐい切れません。また、端から見れば「幸せそうで、羨ましいな」と思われる境遇にあっても、本人は「もうちょっと何とかならないか。これはいいけど、あれが……」という、求める心から離れ切れません。

求める心がなくなれば引金になるものもなくなりますから、悩みも苦しみもなくなつて、おだやかに過ごせるようになる筈なのに、なかなかうまくゆきません。

わがままを捨てることは、三徳の反対の「三毒」貪・瞋・痴を捨てることでもあり

ます。

貪は 〇もつともつと〇という心です。

瞋は、腹を立てることです。

痴は、愚痴を言うことです。

いずれも 〇ありがたい〇という、満足の  
ないところに起こります。

〇世のため人のために尽くさせて頂こうと  
いう心になりました、それを実行して行く  
ことが第一です〇

法音寺というお寺になる前、当然のこと  
ですがお坊さんはいませんでした。現在は、  
私以下、大勢お坊さんがいますが、お坊さ

んの世界には僧階というものがありません。

階級です。しかしお寺になる前は、会長の

杉山先生、村上先生は別格として、他の人

は皆さん、同じ立場にありました。どの人

が上でどの人が下という階級や差別はあり

ませんでした。違いがあるとすれば、その

人はどれだけ人を力づけたか、喜ばせたか、

教化が出来たか、徳が積めたか、というこ

との差です。差というより、人を喜ばせら

れる人、力づけることのできる人は皆さん

の評判がいい、ということになるわけです

が、上・下という差別は一切ありませんで

した。

人間社会はどうしても「出世」ということが大事にされます。学校で、卒業式に歌う歌の中に、身を立て、名をあげ……という歌詞があります。最近はこの言葉はいかがなものか、という人がいてあまり歌われなくなつたと言いますが、人間が生活をしてゆく上に於てはまず、ちゃんとした職業に就く必要があります。そこでは出世する、ことが重要視される場合もあります。ですが、修養・信仰の世界からゆきますと、必ずしも出世しなくてもいいのです。人の役に立つ人になることが何より大事にされるのです。特別偉い人にならなくても、そ

の人がいることによって他の人が少しでも楽になる、助かるということがあれば、それは大変いいことです。

こうしたことは、世の中もそうでありますが、その前に自分の家について考えてゆく必要があるように思います。家族みんなが喜んで、安心して生きてゆけるとしたら、その人は役に立つ人、修養のできた人ということになります。お母さんはお母さんらしいことをする、お父さんはお父さんらしいことをする、子どもは子どもらしいことをする、ということなのです。それが安心を施すことになるのです。その上に何か特別な

ことができた如果说うことありません。

修養・信仰の世界は、別に偉い人になる

必要はないし、有名にならなくてもいいの

です。自分のできることによつて他の人が

安心できるということが、何よりの肝心で

あります。

〃そういう心構えと働きて徳が積まれる〃

〃ああしたい。こうしたい〃という心を私

共持っています。しかし、なかなか思うに

まかせません。そうなるとやはり、心はさ

みしくなります。しかし、自分のできるこ

とで喜んで頂くということでしたら、そ

こには損も得も出て来ません。自分のでき

ることで人に喜んで頂けたら、こんなあり

がたいことはありません。また、それがう

まくゆかなくても、ガツカリする必要はあ

りません。

出世するとか有名になるということでし

たら、なれなかつた場合、頑張った甲斐が

なかつた〃ということになります、世の

中そんなに簡単にゆくことはないと思いま

す。

アメリカの大リーグで活躍するイチロー

選手は大変有名であり、力もある立派な人

です。ここに至るまでにはしっかりした目



標を立て、大変な努力・精進を重ねて来たことでしょう。しかし私共の人生は、目標を立ててやっても思うようにならないことはあるものです。その方が多いかも知れませんが、今申し上げたように、求める心〴〵というのは、失敗することもあるのです。しかし、修養の場合は、求める〴〵ではなく、言うならば、捧げる〴〵と言いましうか、もともと自分のことができることで人を喜ばせてあげよう、力になろうということでありますから、失敗ということはないのです。

捧げる心〴〵は、豊かな心です。このこと

で喜んでもらえなくても、それは失敗ではないのです。また別の方法を考えてやってゆけばいいのです。

〴〵相手を喜ばせてあげよう〴〵というと大げさかも知れませんが、安心させる〴〵こと自体が、修養ということであるのです。

そういう心が出来ると落ち着いて来ます。自分がいることによって他の人が安心できるということでしたら、足りなければまた努力すればいいのです。そういう心でやってゆきましょう。